

(概要版)

児童生徒の心の安定を図る学校教育相談体制の充実についての研究

－教員とスクールカウンセラーの協働にかかわる調査研究と実践を通して－

長期研修員 鈴木尚明

こんなこと考えたことはありませんか？

スクールカウンセラーはどんな専門性をもっているのだろうか？

スクールカウンセラーと話をしたことがないな。



スクールカウンセラーは学校の中で何をしているのだろうか？

スクールカウンセラーにもっと活躍してほしいな。

そこで・・・

スクールカウンセラーが活躍できる学校教育相談体制の充実を図るための研究をしました

国や群馬県の動向

文部科学省

○平成7年度
「心の専門家」としてスクールカウンセラーを全国に配置

スクールカウンセラー(SC)とは、児童生徒の臨床心理に関して高度に専門的な知識・経験を有し、児童生徒の不登校や問題行動などの対応に当たる「心の専門家」です



群馬県

○平成19年度
全公立中学校170校にスクールカウンセラーの配置完了
○平成22年度
スクールカウンセラーが訪問する小学校を21校から60校へ、高等学校では21校に配置



平成22年度は群馬県公立小・中・高等学校などで108人のSCが活躍しています

群馬県では、児童生徒の心の安定を図るために今後もSCの活用を拡大充実させます

研究内容

調査研究 「教員とSCの協働にかかわる充実度及び意識調査」

1 調査内容

- (1) 教員とSCとの協働にかかわる充実度調査(22の質問項目)
- (2) 教員とSCがよい協働を図るために必要と考える意識調査(21の質問項目)
- (3) 教員とSCとの協働がうまくいっている実践例

2 調査対象

群馬県公立中学校に配置されているSC98人とそのSCが勤務している学校の管理職・教育相談主任・一般教員・養護教諭の各1人(各校4人ずつ合計392人)



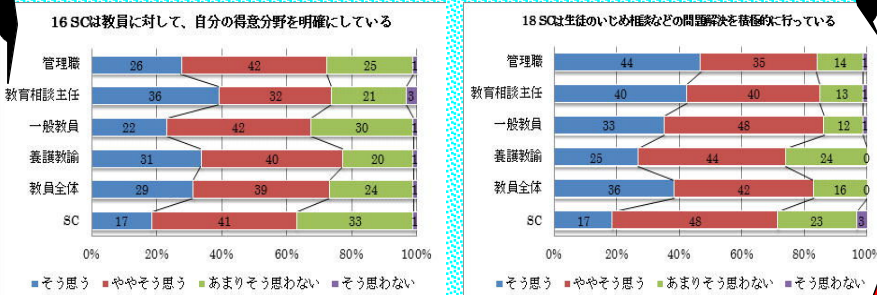
提言 「教員とSCの協働のポイント」リーフレット作成

実践 調査結果を生かした実践

充実度調査の分析から

22の質問項目を統計学の χ^2 検定にかけたところ、以下の項目で有意差が見られた。

- 「SCの仕事内容について、全職員の共通理解が図られている」
- 「教育相談主任を中心とした教育相談体制が作られている」
- 「教員はSCから子どもの心理や保護者とのかわり方などについて学ぶ機会がある」
- 「SCは教員に対して、自分の得意分野を明確にしている」
- 「SCは教員に対して、コンサルテーションを行っている」
- 「SCは生徒のいじめ相談などの問題解決を積極的に行っている」
- 「SCは生徒に対して、全校集会などで講話をしている」



すべての項目でSCが教員より低い傾向にある。
＝不十分と感じている

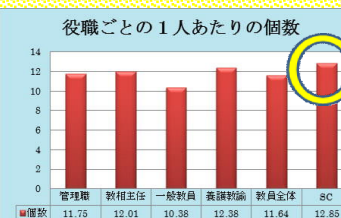
意識調査の分析から

1 教員とSCの協働に対する役職別意識

「管理職」「SC」は意識の高い項目(70%以上)が多く、協働に対して積極的な考えをもっている。「教育相談主任」は意識の低い項目(50%未満)が少なく、協働が必要であると考えている。また、協働を図るために必要と考える役職ごとの一人あたりの個数では「SC」が一番多く、協働に対して一番必要性を感じている。

役職別意識の高低(数字は21項目の個数)

	管理職	教育相談主任	一般教員	養護教諭	教員全体	SC
90%未満	8	6	13	9	9	8
70%以上	4	3	1	2	2	4



2 SC及び教員のそれぞれ意識が高いもの

- ① SCが教員よりも意識が高いもの
- ・「教員へのコンサルテーションをする」
 - ・「ケース会議を開く」

SCは個を対象とした問題解決的な教育相談を重視している。



充実度の高い学校は、教員とSCの意識の差がありません。

教員はSCに、予防的・開発的な教育相談も含め幅広く専門性を発揮することを期待している。

- ② 教員がSCよりも意識が高いもの
- ・「SCが教育相談の技術を教員に教える」
 - ・「全校集会などでSCが講話をする」

2つ(充実度調査・意識調査)の分析結果から言えること

1 学校組織とSCがつながることが大切 ジョイニング

学校組織は、学年・学級などで構成されたシステムである。SCは学校システムの中では外部性をもった存在であるため、孤立せずに組織とうまくつながることが大切である。その上でコーディネーター役の教育相談主任の役割が重要。

そこで、「SCが教育相談の技術を教員に教える」ための教員とSCをつなぐ活動を企画したり、「SCが教員へのコンサルテーションをする」といった日常の活動を活性化させたりしてジョイニングを図ることが大切。

2 教員とSCが協力することが大切 コラボレーション

SCは教員が思っているほど現在の状況に十分に満足してはいない。つまり、SCの専門性が学校システムにおいて発揮されておらず、協働(コラボレーション)が十分に図られていないということである。

そこで、「SCを交えたケース会議を開く」などを教育相談部会を中心に行ったり、「全校集会などでSCが講話をする」などSCの専門性を幅広く学校内で生かしたりすることが大切。

用語説明

○ジョイニング

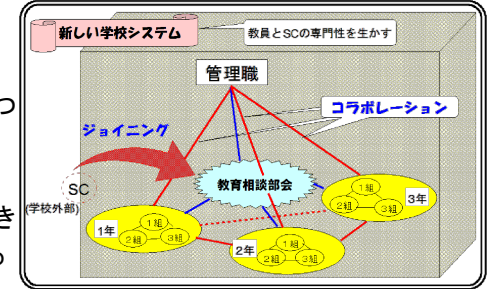
SCと学校システムがつながる関係づくり。ジョイニングがうまくいくと、SCが生き生きと専門性を発揮できるようになる。

○コラボレーション

互いに専門性が違う者同士が同じ目的をもち働いていくこと。コラボレーションを図ることによって、お互いの専門性がさらに生かされるようになる。

○新しい学校システム

ジョイニングをしコラボレーションを図る、SCを初め各人の専門性を生かせる開かれた学校組織が求められている。



教員とSCの協働のポイント

こんなことしてみてもいいですか？

調査研究の実践例をもとに作成しました

管理職のビジョン

学校課題の明確化、SCの勤務形態の明確化、SCの業務内容の具体化、他の非常勤職員との役割の明確化等

ジョイニング

コーディネーター役の教員(教育相談主任)が中心になりましょう

コーディネーター役教員がスケジュール調整をします

- SCの予定表を毎回作成します
- SCの勤務日のスケジュールを、コーディネーター役教員ができるだけ事前にSCに伝えます(メール、ファックスなどで)
- SCの相談予定を職員に周知します(相談予約表を職員室に置く、予定表を配布する)

教員とSCの人間関係を作ります

- SCと教員が気軽に話をします(教員から話しかけましょう)
- SCが各クラスの給食に参加します
- SCが年度初めに各教室を訪問し、児童生徒に自己紹介や面談方法など説明をします
- SCが保健室を訪れ、児童生徒と話をします
- SCが教員向けのお便りを出します
- 教育相談主任が、「SCが教育相談の技術を教員に教える」などの企画をします



児童生徒支援に必要な情報共有の仕組みを作ります

- コーディネーター役教員との打ち合わせの時間を確保します(SC勤務日の1校時など)
- 教育相談部会で話し合われたことを職員に周知します(ファイルを回覧するなど)
- カウンセリングの様子を記録し職員で共有します(情報共有シート、相談ノートなど)
- 年度初めや夏期休業中などに、SCと担任で情報の交換をします
- SCが授業参観を行い、児童生徒の様子を観察します
- SCが新入生全員の面談をします

教員の専門性

- ・学年学級経営
- ・教科指導
- ・集団の指導及び集団の中で個を生かす指導
- ・研修や集会などの企画、運営



コラボレーション

教員とSCのお互いの専門性を生かしましょう

教員とSCで授業実践・集会活動・校内研修をします

- SCが担任や養護教諭とTTで授業を行います(構成的グループ・エンカウンター、ピアサポート、ソーシャルスキルトレーニングなど)
- SCが集会で講話をします(全校集会、学年集会、学校保健委員会、保護者会など)
- SCが校内研修で、講師を務めます

SC参加の教育相談部会を開きます

- SCの活動を盛り込んだ教育相談年間指導計画を作成します
- チーム援助会議を開きます
- 教育相談部会では、ケース会議を開きます

教員とSCで児童生徒、保護者へのサポートをします

- SCが児童生徒理解のためのアンケートを行います
- SC勤務日の放課後にその日のカウンセリングの内容の確認をします(SCとコーディネーター役教員、担任、学年主任などで)
- SCが別室登校児童生徒と一緒に授業を受けたり集会に参加したりします
- SCが別室登校児童生徒の保護者「親の会」などを作り定期的に懇談会を開きます

教員とSCと一緒に学校外活動を行います

- SCが教員の家庭訪問に同行します
- SCが教員の外部機関訪問に同行します

SCの専門性

- ・児童生徒、保護者へのカウンセリング
- ・教員へのコンサルテーション
- ・児童生徒のアセスメント(見立て)
- ・外部機関との連携



《学校教育相談体制》

実践例

《教員とSCのジョイニング、コラボレーションを目指して》

①校内研修『全職員で行う教育相談』



SCの業務内容や学校内での存在、カウンセリングマインドなどの話や事例報告を中心とした内容であった。SCと教育相談主任、校内研修主任の三者の中心的なジョイニングから大勢の教員のジョイニングのきっかけを作り、コラボレーションの必要性を意識付けることができた。

- ・全職員でSCの在り方や考え方などの共通理解ができた。（教員）
- ・SCに声をかけて相談しやすい気持ちになった。（教員）

②学年集会『楽しい中学校生活を目指して』



生徒達にSCの存在や仕事内容を知らせ、講話や活動を通して専門的な視点から生徒自身の心に目を向けるきっかけを作った。SCと教育相談主任、学年主任の三者の中心的なジョイニングから学年教員とのジョイニングのきっかけを作った。また、SCが生徒の心に働きかける講話をし、教員が友達と協力して解決していく活動を展開していくことで、両者のコラボレーションを図ることができた。

- ・今回をきっかけとして、もっとたくさんの人と話をしていきたいと思った。（生徒）
- ・直接SCの話を聞くことで、何人かの生徒の中に「自分も相談してみたい」「話を聞いてほしい」と思う生徒が出てきたように感じる。（学年教員）
- ・生徒たちが廊下で会ってあいさつや話をするようになったり、カウンセリングルームに来たりするようになった。（SC）

③SCによる授業参観

SCが全学級の授業参観を、各学年教育相談担当教員と共に行った。学年教育相談担当教員とのジョイニングから、各教員へのコンサルテーションへと結びつけることをねらいとした。SCの専門的な視点から、配慮が必要な生徒あるいは日常生活で見落とされがちな行動などを観察した。

- ・今までにかかわった生徒の集団の中での様子を見ることができ、逆にこれからが心配な生徒についての情報交換もすることができた。（SC）

提言

それぞれが専門性を発揮した学校教育相談体制づくりのポイントはこれ！！

1. 管理職のビジョンを受けて、教育相談主任が組織の推進力を担いましょう

2. SCと学校システムの関係づくりをていねいに行いましょう（ジョイニング）

3. 教員とSCが子どものために一緒に取り組みましょう（コラボレーション）

※詳細は見開きに掲載してあります。

問い合わせ

群馬県総合教育センター

担当係：生徒指導相談係

0270-26-9217（直通）